

私が好きな歴史と民俗の博物館

埼玉県立歴史と民俗の博物館には、様々な魅力的な場所があります。そこで、今回は私が魅力を感じている「縄文時代～弥生時代にかけての土器展示」について紹介いたします。歴史と民俗の博物館では第1室～10室に渡り、埼玉の歴史資料・美術資料・民俗資料を展示しています。その中でも、この土器群が見られるのは第1室になります。



縄文時代といえば、土器に縄目の文様が付いていることが特徴です。野焼きという方法で、低温でじっくりと焼かれており、後に出てくる弥生土器と比べると厚手の様相となっています。この時代の人々は何を食べていたのかという、採集したトチ・クルミなどの植物や、この埼玉県にも昔は海がありましたからその海や川からとる魚や貝、狩りによって得られた獣類などが主になります。昔の人々はこれらを調理し、食していました。

展示室を進んでいくと、続いて弥生時代の土器に移ってきます。弥生時代になると、稲作が伝わり普及します。そのような新しい文化が伝わったことで土器の形態も大きく変化し、縄文時代とは大きく異なってきます。焼成法として野焼きから、土器に土を被せて高温で焼く手法に変化します。また、縄文時代に見られていた縄目文様が見られなくなり、質素でシンプルな見た目の土器が多くなります。(例外として、薄く縄目文様が描かれた弥生土器なども埼玉県に存在しています) これらの土器には料理をするときの煮炊き用の甕かめや、盛り付けをする高坏たかづき、また貯蔵に利用する壺などがあり、その種類・用途は多岐にわたります。

第1室は旧石器時代の歴史から始まりますが、旧石器時代を抜けた先に、これらの土器群が展示されています。展示ケース内の上から下まであらゆる土

器を置き、迫力満点な展示となっています。縄文→弥生と、時代を追って展示されていることで時代の流れと歴史をよりリアルに感じられるのではないでしょうか。実際に見てみると他の展示室にはない雰囲気を感じ、その景色は荘厳で圧巻です。展示されている土器については大きさもまちまちで、手のひらに収まるものから、抱えないと持てないであろう大きさの土器まで様々な種類の土器が飾られています。また、色にも注目してみてください。よく見ると焦げて黒くなっている面や、つぎはぎでなんとかくっつけて修復したものなど、一つとして同じ物はありません。縄文土器の文様に注目して見るもよし、弥生土器の形に注目して見るもよしで、一つ一つを見比べて自分だけのお気に入りを探してみるのも楽しみ方の一つなのではないでしょうか。

そして土器展示の近くには多くの解説や図が書かれており、非常に勉強になりますので、是非じっくりと読んでみてください。私たちが住んでいる埼玉という土地の昔の様相について、先祖の暮らしについての知識が身につきます。



以上、縄文時代から弥生時代に渡る土器群についての展示を、私のおすすめとして紹介してきました。この場所以外にもこの歴史と民俗の博物館には魅力的な展示物や場所が多くありますので、自分だけのお気に入りの場所を見つけてみてください。

実習生 M.M

私が好きな歴史と民俗の博物館

歴史と民俗の博物館にはたくさんの窓があり、展示室ごとに大きさや光の入り方が異なっています。そのため、今回はそのような窓の中でも展示室や展示室を繋ぐ廊下の窓について注目しました。

1枚目の写真は1階にある第5展示室から地階の第6、7展示室を繋ぐ階段の窓で、大きな窓から外の竹林を見ることが出来ます。展示室は部屋ごとに照明の明るさが異なっているため、次の展示室に行く途中で自然光に当たることのできる場所があるというのは、気分的にも落ち着けるのではないかと思います。また展示室の先に窓や緑があるというのは、次の展示室への気持ちの切り替えや思考のリセットが出来るので、好きな場所の一つでもあります。さらにただ風景を見るだけではなく竹林という緑を見ることが出来るので、目を休めることも出来る良い場所になっているのではないかと思います。



地階へ続く階段（第5展示室先）

2枚目の写真は第6展示室にある大きな窓です。第6展示室は他の展示室とは造りが異なっており、吹き抜けになっていたり窓が多かったりといった展示室となっています。また、展示品も板碑などの比較的大きな資料が展示されているため、他の展示室のような造りの部屋よりもこのような広々とした空間を使用することで、圧迫感の無い鑑賞しやすい空間になっているのではないかと思います。また、自然光が入ってくることで優しく温かい雰囲気が展示室全体を覆っているため、この第6展示室の「板碑

に込められた戦乱の時代の人々の願いを紹介します」といったテーマに合っているのではないかと思います。



第6展示室の窓

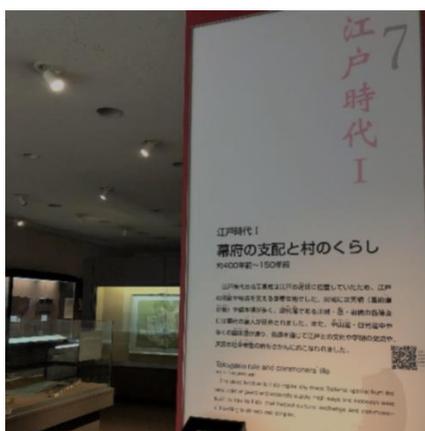
私はこれまで博物館=展示品を見る場所という感覚で訪れていたため、展示品以外に目を向ける余裕がありませんでした。ですが今回の博物館実習を通じてゆっくりと展示品以外の空間に目を向けることが出来たので、とても良い経験をさせていただきました。中でも今回取り上げた窓に関しては、普段であれば窓があるなという印象で終わってしまうのですが、その窓が何故その場所に設置されているのか、その窓が与える効果とは何か、展示室ごとにどのような違いがあるのかといった点も改めて考えることが出来たので、楽しかったです。以上が歴史と民俗の博物館の中で私が好きだと感じた場所です。今まで展示以外にあまり目を向けたことがなかった人も、一度ゆっくり立ち止まって展示以外にも目を向けてみると新しい発見があるかもしれません。

実習生 R.M

私が好きな歴史と民俗の博物館

「埼玉県立歴史と民俗の博物館」の常設展は第1室から第10室まであり、「埼玉における人々の暮らしと文化」をテーマに、縄文時代から近現代、さらに美術品や民俗まで幅広い展示を行っています。

「第7室 江戸時代Ⅰ」は博物館の1階から階段を下りた地階にあります。地階には、「第7室」のほか、「第8室 江戸時代Ⅱ」、「第9室 明治時代～現代」、「第10室 民俗展示室」があります。



(写真) 第7展示室 江戸時代Ⅰ

「第7室 江戸時代Ⅰ」では、江戸時代の埼玉における旗本の支配や、当時の農民支配について、中山道や日光道中などの街道、民間信仰などの内容を扱っています。

展示されている資料は、古文書や高札、甲冑(具足)、庶民の駕籠の復元模型、栗橋の関所8分の1スケール模型など、大小様々な資料が展示されています。



(写真) 日光道中栗橋の関所8分の1スケール模型

多様な資料が展示されている第7展示室ですが、その中でも庶民の旅に関する展示資料があります。そこでは、江戸を中心とした街道が整備されたことで、江戸時代に寺社を巡る旅が庶民の間で流行していたことを知ることができます。

展示されている資料には、提灯や小物入れ、印籠といった旅に関する資料があります。また、これらの資料のほかに、源之丞という人物が安政6年(1859)に数十人の同行者とともに埼玉県慈恩寺村(現さいたま市岩槻区)から伊勢参りに向かうまでの日記の読み下し文のパネルが展示されており、日記から当時の旅の様子を知ることができるようになっています。

展示されている庶民の旅に関する資料の中で、個人的に好きな資料を2つ紹介したいと思います。1つ目は「道中小物入」という資料です。この資料は、旅において必要な物を持ち運びやすいようにコンパクトになるよう工夫されており、手の平より小さい布製の小物入れになっています。また、中には櫛や耳かき、ヤスリ、握りばさみ、小刀、千枚通しの6点が入り、旅の必需品を携帯できるようになっています。小さいながらもどの道具もとても精巧に作られています。

2つ目は「伊勢道中細見記」という資料です。この資料は宝暦13年(1763)のものであり、現代で例えると旅のガイドやマニュアルのようなものです。大阪から伊勢までの道中案内や観光名所の案内、旅の注意事項など、細かい描写の絵とともに記してあります。手に収まるほどの大きさで、持ち運びに便利のように工夫が凝らしてあります。

今回紹介させていただいた資料のほかにも、見ごたえがある資料が展示されていますので、この博物館に足を運んだ際には是非ご覧いただければと思います。

実習生 M. Y

私が好きな歴史と民俗の博物館

えどじだい 江戸時代の旅行

しよみん ○庶民の旅

江戸時代中頃になると、交通網の整備と共に、庶民の旅が流行します。現代より、困難な旅でしたが、馬やかごなどの乗り物や、旅籠（旅行中に食物・手回り品などを入れて持ち歩く籠）もありました。交通の要所に設けられた関所を通るには手形が必要でした。旅の目的は寺社の参詣が主でしたが、気晴らしに見物や遊びに行くという要素も強くありました。伊勢講・榛名講という共同で旅の資金を積み立て、毎年数人ずつ参詣する「代参」という制度もありました。



どうちゆうこもの
道中小物入れ 江戸時代 当館蔵

いせまい ○伊勢参り

江戸時代の一般の人々は、原則的に在所（住んでいる場所）を離れることは禁止されていました。ただ、社寺参りのための旅は許されており、伊勢神宮（三重県）へのお参りの旅は、最も代表的なものになっています。



いせ どうちゆうさいけんき ほうれき
伊勢道中細見記 宝暦13年（1763年）当館蔵

げんのじよう ○源之丞の伊勢参り

安政6年（1859）、埼玉郡慈恩寺村の源之丞は、十数人の同行者と共に伊勢参りの旅に出ました。正月9日に家を出発し、江戸から東海道を西に向かい、伊勢神宮に着いたのは、2月1日でした。参拝を終えた一行は、四国の金比羅宮（こんびらさん）まで足をのびしました。帰りは、京都から中山道を通り、善光寺を経て3月26日に帰村しました。約3カ月にわたる大旅行でした。

実習生 M. N

私が好きな歴史と民俗の博物館

古代のお墓

皆さんは埼玉県立歴史と民俗の博物館に大型の復元された展示があることを知っていますか？1 つは入口の前にある弥生時代の竪穴住居の復元、もう1 つは第2室にある金崎古墳群大塚3号墳という古墳の復元です。

古墳とは現代でいうお墓のことです。実は古墳には鍵穴の形をした一番有名な形の前方後円墳、四角の形をした方墳、丸い形をした円墳など様々な形があります。古墳といえば埴輪が並べられたことも有名です。

私が好きな展示はこの古墳の復元です。この展示は古墳の断面が復元されており、古墳の内がどのようになっているか分かりやすくなっています。この古墳は秩父の皆野町にある古墳時代後期の円形の古墳で8.05mの横穴式石室があります。石棺が置かれている部屋である玄室と入り口は羨道と呼ばれる石で作られた道でつながっています。石室には竪穴式石室・横穴式石室の2種類があります。竪穴式石室では上から埋葬するので、追葬ができません。横穴式石室は横に通路があるので、後から死者を追葬できるようになっている形の石室です。この古墳では、誰が埋葬されていたかは分かっていません。石室は秩父地方で多く採れる結晶片岩をドーム状に積み上げて築かれていて、古墳時代後期には古墳の立派さよりも石室の立派さに力を入れたとされています。

石室内には死者と共に副葬品が埋葬されており、耳飾りや腕輪、冠、靴、などの装身具や、剣、大刀などの武器、鎧などの武具、馬具、鏡、土器などがあります。この副葬品も古墳時代の中で変化があります。前期は弥生時代からの流れで銅鏡などの呪術的なものが多かったのに対し、後期になるにつれて武具などの実用的なものになりました。



この展示の特徴は石室の中が復元されているだけでなく、石室の周りの土の部分も復元されている事です。土ごとに色を変えてあり、よく見ると土の中に石も入っています。さらに石室の中には副葬品のレプリカが置いてありどのようなものが置かれていたか知ることができます。近くには死者が納められていた別な古墳の石棺の展示もあり、どのくらい大きさの石棺なのかや使われていた石の大きさが分かります。



是非足を運んでどんな人が埋葬されていたのかぜひ想像してみてください。また、全国にどのような形の古墳があるのか調べてみてください。

実習生 K.O

私が好きな歴史と民俗の博物館

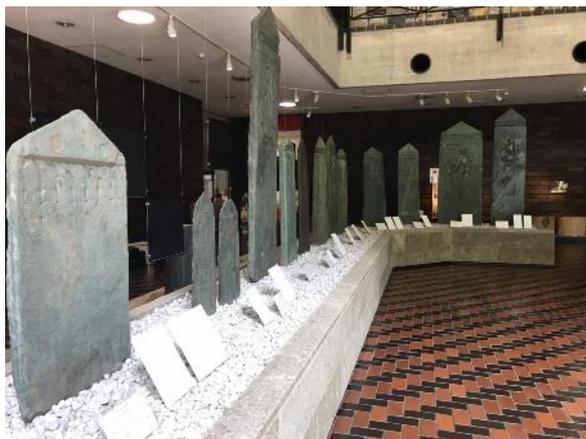
私が初めてこの博物館を訪れたのは大学2年生の秋でした。その時に衝撃を受けた展示が今回紹介する第6展示室の板碑の展示です。

皆さんは板碑をご存じでしょうか。薄く、縦長の石に梵字と呼ばれる文字や作られた年の年号などが彫られている石造物のことを言います。鎌倉時代以降に作られ、板石塔婆という呼び方もあります。大小様々な種類がありますが、この第6展示室には大きな板碑がいくつも並んでいて、展示室から見上げても、階段を上った上から見てもかなり存在感のある展示になっています。

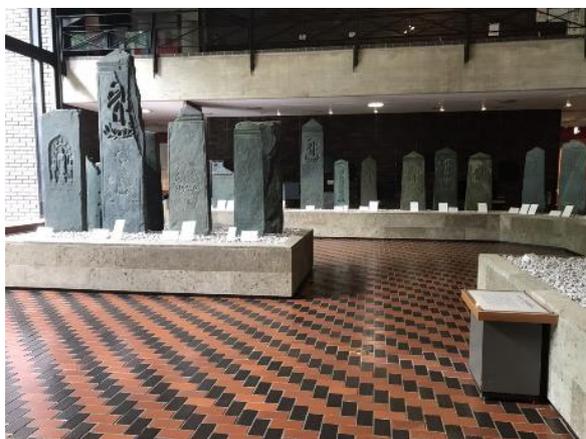


板碑は九州・四国から東北・北海道まで確認されていて数も多い石造物の一つですが、最古と言われている板碑は埼玉県で発見されています。また、関東地方の板碑には秩父や比企産の緑泥石片岩と呼ばれる板状にはがれやすく、加工のしやすい石が使われているものが多く、それに伴って埼玉県では板碑が盛んに作られていました。埼玉県の歴史を語る上で欠かすことのできないものがこの板碑なのです。

この板碑は、記念碑のような碑としての意味合いより、もともとは死者の供養のため立てるといふ墓石に近い意味合いを持っていました。江戸時代以降位牌や石碑墓といった別の石造物が普及するため、数は減少しましたが、人々に長い間親しまれ、祈られてきたという歴史を持っています。



私がこの展示室が好きな理由は、何より石造物をこれほどの数を展示し、尚且つこれほどまでに大きな板碑を展示できる広さと高さを併せ持った、県立の博物館ならではの展示だと思うからです。ちなみに、初めてこの展示室を見たとき、余りに驚いて自身のInstagramに投稿したことを記憶しています。写真ではこの驚きをすべて伝えることは不可能なので、ぜひ足を運んでいただきたいと思います。



石造物はありふれているものではありませんが、一つ一つにかかわった人々の祈りや思いを感じることができる歴史的資料です。この面白さを存分に味わうことができる板碑の展示が、私はとても好きなのです。

実習生 M. H

私が好きな歴史と民俗の博物館

今回は、私が一番好きな展示物である歴史と民俗の博物館地階、⑦江戸時代Ⅰに展示されている川越城復元模型を紹介します。

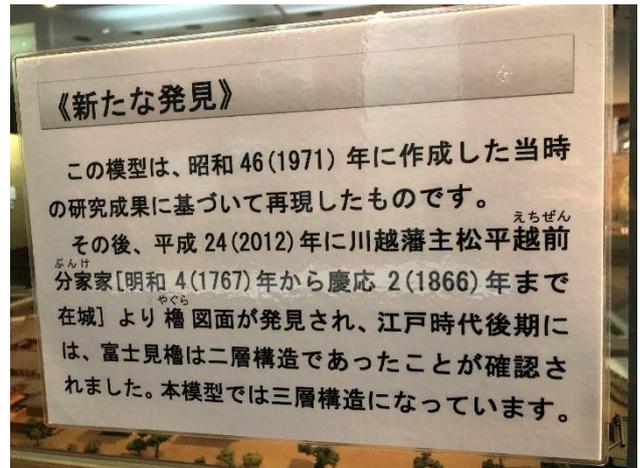


(上部写真川越城復元模型)

そもそも川越城とは長禄元年(1457)、上杉持朝の命により「太田道真・道灌」親子によって築城された、関東七名城のひとつです。室町時代以来の名城で武蔵国でも最も重要な城と言われています。現在の川越城のほとんどは市街地になってしまっていますが、明治6年(1873)に発せられたいわゆる廃城令により城の大半が解体された中でも本丸御殿の一部はその被害を免れました。現存する建物は嘉永元年(1848)に建てられた物で本丸御殿の玄関・大広間・家老詰所が残っており、県指定文化財に指定されています。

館内に展示されている模型は、昭和46年(1971)に作成した当時の研究成果に基づいて、川越城の江戸時代末期の姿を再現したものです。

模型は、一周しながら見渡すことができ、そのスケールの大きさに驚きます。特に本丸御殿は精密で建物から今にも人が出てきそうなほどリアルに作られています。情報も日々更新されており、研究が進むことで三層ではなく二層であったという事実が明らかになった櫓の説明訂正文もしっかり表示されています。



(櫓の説明訂正文)

時代の流れによって失ってしまうものはたくさんあります。それでも研究し残された資料や史跡から模型や写真、文章に残していくことで、後世の人々に私たちの歴史を伝えていくことはとても大切なことなのではないかと感じます。

実習生 A. S

私が好きな歴史と民俗の博物館

私が好きな歴史と民俗の博物館の展示は、常設展示の最初の歴史展示室で、遺跡から発掘された多くの出土品を見ることができる常設展示室第1室（旧石器～弥生時代）です。

この展示室で扱われている旧石器時代、縄文時代、弥生時代は、まだ文字が発明されていない時代であるため、これらの時代の人々が実際には何を考え、どのような生活をしていたのかを知ることはできません。住居跡や貝塚、墓などの遺跡と発掘された出土品を調べて、その状態をもとに人々がどのように土器などの道具を使っていたのかを推定して研究が進められています。

縄文時代の遺跡では、土器のような実用的な道具の他にも、まじないの儀式のために作られたと考えられている道具が多く発見されています。代表的なものに、土偶や土版、石棒や石剣があります。このような「まじないの道具」を集めた「生への祈り」の展示ケースが、私が一番好きな展示です。



土器のような実用的な道具は、現代の私たちにとっても身近な食器や鍋、壺などに似た形をしていたり、縄文人が食べていたイネやマメなどの跡がついていたりすることから、どのように使用された道具なのか、わかりやすいものが多いです。

しかし、願いをこめて儀式に使ったまじないの道具と考えられている土偶や土版、石棒や石剣については、残念ながら実際に縄文人がおこなった儀式の記録がまったく残っていないため、本当にまじないの道具だったのか、どんな儀式をおこなっていたのか、正しい答えを知ることはできません。



まじないの道具の中でも、土偶はおおよそ一万年間の縄文時代の初めから終わりまで、日本全国で数多く製作されました。製作された地域や時期によって、大きさや形の特徴は様々です。

埼玉県で発掘された土偶として有名なものは、展示ケース中央付近に飾られている、大きな丸い目の「みみずく土偶」と呼ばれる形の土偶です。土偶は壊れてしまった状態で見つかるものが多いですが、さいたま市の真福寺貝塚ではほとんど欠けていない状態のみみずく土偶が発見されています。

多くの土偶はひとがたで、お腹や胸の表現から、妊婦や育児をする母の姿を表していると考えられています。縄文時代の出産・育児は現代以上に命がけで、出産時に亡くなってしまう母子も多く、無事に生まれても小さいうちに亡くなってしまう子どもも多い時代です。このことから、妊娠や母の姿を表す土偶は安産祈願のお守りだったという説が有力視されています。

一方で、みみずく土偶の仲間には妊娠を表すような表現があまり見られず、人間離れた姿をしていることから、縄文時代に信仰された精霊の像ではないかという説もあります。また、壊れた状態で見つかる土偶が多いことから、怪我や病気の部位を壊すことで、土偶に身代わりになってもらうという儀式がおこなわれたとも考えられています。

縄文時代のまじないの道具は様々ですが、本当の使い方は誰にもわかっていません。ぜひ、皆さんも土偶や土版、石棒や石剣を見て、縄文人はどのように使ったのか、自分ならどのように使ってみたいか想像してください。

実習生 M. F

私が好きな歴史と民俗の博物館

今回のテーマとその理由

今回は、私は郵便の歴史について紹介しようと思います。普段からお世話になっている郵便などの輸送の歴史について触れる機会が非常に少なかったので、当館の資料と合わせながら紹介していきます。今回は特に郵便制度が開始されたばかりの明治時代に焦点を当てます。

第1章 郵便の歴史

郵便の歴史は明治4年(1871)に郵便制度が開始されたことに始まります。埼玉県では、明治5年(1872)の3月に中山道の宿場をはじめとする主要部に「郵便取扱所」を設けました。しかし、すぐに快諾されたものではなく、江戸時代に地域のまとめ役であった名主に自宅を郵便取扱所に変更する要請をしたうえで成立したものになります。また、当初は郵便事業のみしか開始されておらず、はがきの発行は明治6年(1873)、貯金業務は明治8年(1875)に順次開始されました。さらに郵便局の地図記号でもある「〒」は、明治20年(1887)に逓信省のマークとして最初に用いられていました。

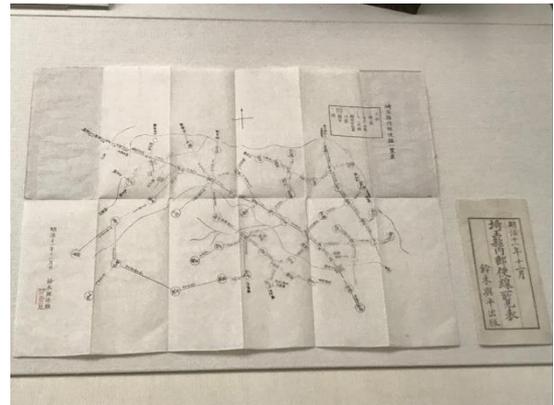


郵便御用箱(当館 蔵)

第2章 当時のネットワーク

先ほども述べたように、当初の郵便は大きな街道沿い(宿場町)に設けることが多かったです。県内では、中山道や日光街道をはじめとする五街道のほか

に川越街道、鎌倉街道などの主要街道を通じて他地域や周辺の都県に配送する道路を整備して繋がりを意識していました。また、埼玉県は東北地方や中部地方の通過点でもあるので横の移動が乏しく、縦の移動が多くあるのも特徴であります。



郵便取扱所の連絡網(当館 蔵)

第3章 前島密の存在

日本の郵便の基礎を形成したのが前島密です。越後国で生まれ、欧州で郵便などの仕組みを学んだ後に日本で鉄道、教育、電話、郵便、海運など多岐に渡って不動の地位についています。「日本近代の郵便の父」と呼ばれ、現在でも1円切手の肖像になっていることでも有名です。

実習生 T. U